

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◇◆◇ No.0707 ◇◆◇

22/10/05

【 二者択一も引き続き「荒れる」10月相場に期待 】

先日終了した9月相場は、月間の変動幅が6.94円となり、前8月の8.68円にはとどかなかつたが、それでもなかなかの変動を記録した。

ちなみに、今年は1月と2月を除く過去7ヵ月の月間平均変動幅はおよそ8円。過去の経験則からすると、10月相場は「まったく動かない」か「非常に激しい動きを示す」か、ふたつにひとつで両極端な値動きを示すことが少なくないだけに、仮に後者であるとすれば「月間10円変動」ーといった展開をたどる可能性を否定できないのかもしれない。

◎為替だけでなく株式も「大荒れ」か、予断を許さない

まずは当レターの恒例となっている過去の経験則のうち、1990年以降昨年まで過去32年間の戦績を見てみると18勝14敗となっている。「ややドル高有利」ではあるものの、率換算では6割にも満たないもので、大きな特徴とは言えないようだ。

しかし、10月相場は2011年から2017年まで7年連続で「ドル高・円安」が進行していたが、2018年以降2020年までの3年間は逆方向の動きとなっている。一度流れができると、それに沿う展開をたどることが多い気もしないではない。ちなみに、昨年は再び「ドル高・円安」へと流れが変化しただけに、今年はヒョットすると「ドル高・円安」方向に有利な可能性もある。

また、それとは別に10月相場には「まったく動かない」か「非常に激しい動きを示す」か、ふたつにひとつで両極端な値動きを示すことが少なくない。ちなみに、一昨年の10月相場は月間変動2.08円、年間10位にとどまるなど前者の展開だったが、昨2021年は逆。月間変動幅3.87円となり、年間2位を記録している。

ただ、いずれにしても仮に後者「10月の大変動相場」となった場合、予測不能ともいえるほどの大相場となることもままあることだけは頭にとどめておいて損はない気がしている。

その典型事例は、大手ヘッジファンドLTCM破たんの余波を受け、変動相場制以降で一日当たり最大級の下げ幅(一日で約12円下落)を記録するなど、月間で25円以上も動いた1998年になるだろうが、2008年の10月も実に月間変動幅15.67円を記録していた。調べてみると、「10年に一度」程度のスパンで、狂ったような大相場・荒れ模様の変動をたどっているのだが、幸か不幸かここ数年は平穏だ。と言うことは、逆に考えて若干後ズレした今年あたりそろそろ「大相場を演じる10月相場」となっても不思議はない気もしないではない。

一方、そんな為替市場に対し、10月の株式市場はともかく荒れる展開をたどることが非常に多い。とくに米株市場にその傾向が強く、それが「悪魔の棲む10月」という言葉を生み出していることも良く知られているところだと思う。

分かりやすい事例を幾つか取り上げるだけでも、米株市場を震撼させた過去の3大暴落「ブラックサザデー(29年)」「ブラックマンデー(87年)」「ブラックチューズデー(89年)」はすべて10月の出来事だった。為替や株式などに限定したものではなく、10月相場は金融市場全般にしっかりと注意を払う必要があるのかもしれない。

最後に相場から放れた観点、ニュースなどをみても、すでに終わった9月に続き10月も日本を中心とした金融機関、なかでも生損保の破たんなどが目につく状況となっている。一例を挙げると「独ハンブルグや米NYで金融恐慌(1907年)」、「山一証券の“とばし”発覚(93年)」、「京都共栄銀が解散発表(97年)」、「長銀国有化(98年)」、「千代田生命が更正特例法申請(00年)」、「大和生命破たん(08年)」ーなどとなる。

そんな過去との整合性を無理やり考えれば、今年の為替市場における予想以上のドル高・円安進行でノックアウト・オプションが消滅。ダメージを負ったメーカーの話が噂ベースで取り沙汰されるなど、実は水面下で危険な状態に陥っている先が幾つかあるという。ヒョットするとそれが一気に表面化するような動きが

